

「2030年の水島、こうなったらいいな」 ～持続可能な地域をめざして～

1995年、倉敷公害訴訟の和解前に作られた「よみがえれ 水島のまち 公害のまちから緑と水、賑わいのまちへ―水島再生プラン」（1995年）は、患者さんの願いです。次の世代へ夢として託されました。

みずしま財団設立20年の節目にあたり、プランをもとに現状を環境アセスメントの手法でチェックし、新たに「2030年の水島、こうなったらいいな」を作成しました。本プランでは2030年を目標年度としています。この2030年は国連が定めたSDGs(持続可能な開発目標)の達成年度です。本プランは、私たちのSDGsです。



持続可能で、住み続けたいまち水島の実現のために、地域の皆さんとともに取り組みたいことを考えてみました。ぜひ、一緒に水島の未来をつくっていきましょう。

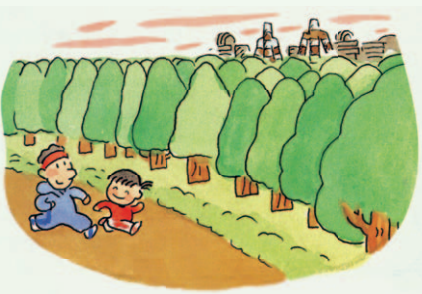
【SDGsとは】
Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)の略。持続可能な社会をつくるために、世界が抱える問題を17の目標と169のターゲットに整理したものの(2015年9月に国連で採択)。2030年までに、政府、企業、地域社会のあらゆる人が、SDGsを実現するための役割を担っています。

①グリーンベルト(緑の木)でコンビナートをつつむ

<1995年の提案>

まるで森の向こうに工業地帯があるように住宅と工場をグリーンベルトで分けます。

今の工場立地法を活用したり県条例の上乗せで実現させましょう。併せてコンビナートの安全基準見直しやチェック体制を考えます。



現在の状況

【グリーンベルトの整備】

緩衝緑地(グリーンベルト)は、総面積67.5haが1971～1983年にかけて整備され、樹木は大きく育っている。みずしま財団では、2000年に緩衝緑地と地域内の児童公園の樹木のCO₂吸収量調査を実施し、水島コンビナートからの排出量との比較を行った。水島コンビナートからの年間排出量の推計(約780万t)と比較して圧倒的に少なかった。

【地球温暖化防止】

岡山県内の温暖化物質の排出量の約60%は産業部門からの排出であり、著変ない。みずしま財団では、2010年度から岡山県の制度をもとに、県内の温暖化物質の排出状況を調査し、削減に向けて、市民を対象に啓発活動を行っている。



緩衝緑地

【公害対策】

倉敷市の光化学オキシダント注意報発令は、2006年以降連続しており、原因究明や発生抑制の課題が残っている。洗濯釜が煤で汚れる等、煤塵について住民の声があり、市にも苦情が寄せられている。

②まちに賑わいの拠点を

<1995年の提案>

八間川の水と緑を豊かにした街のシンボルストリートづくり。企業社宅の再整備で企業はまちづくりに貢献を、商店街のにぎわいをとりもどす工夫など知恵をあつめましょう。



現在の状況

【八間川を親水空間に】

みずしま財団では、1999年から八間川を人々が憩える親水空間とすることを目的に「八間川調査隊」を毎年開催し、人々の関心を高めてきた。

【学びを通じたにぎわいの創出】

市民・企業・行政・大学等が連携した「環境学習を通じた人材育成・まちづくりを考える協議会(以下:協議会)」(2013年～)が、学びとまちのにぎわいの創出を目指した活動を実践している。

【まちづくりへの連携】

みずしま財団では、他団体と連携し、まちのにぎわいの創出を目指して、水島お雛めぐりや、水島港まつりの踊りのイベントの支援、ミズシマ・パークマネジメント・ラボラトリーと連携した未利用空間を活用した憩いの空間づくりを進めている。



2030年の水島、こうなったらいいな

- 水島で学ぶ若者が、歴史や過去の経験から学び、地域の魅力を発見し、新しい価値を創造できるようにする。
- 学びを支える人・資源・情報が集まるようにする。未来をつくりだす学びの拠点(資料館、交流館)の整備を進める。



③健康、福祉のまちづくり

<1995年の提案>

みんなが健康であるために、緑と新鮮な空気が吸えるよう医療や高齢者向け施設も充実しているまちに。

水島をかこむ連山を活用しての健康と史蹟の散歩道、休耕地を活用しての菜園づくり、工場の排熱を利用した温水プールなど思いはいっぱいです。



現在の状況

【自転車による健康づくり】

みずしま財団では、「倉敷・総社温暖化対策協議会 交通システムグループ」と連携して地域内を自転車で巡るルートを作成し、親子連れで実際にルートを走り、検証した。

【COPD対策の取組】

みずしま財団では、倉敷市内の医師会、保健師、専門職の人と一緒に「くらしきCOPDネットワーク」を立ち上げ、地域の愛育委員と連携した肺年齢測定を地区の11カ所のミニ健康展等で実施するなど、COPD(慢性閉塞性肺炎疾患)の早期発見・治療の取り組みを進めている。

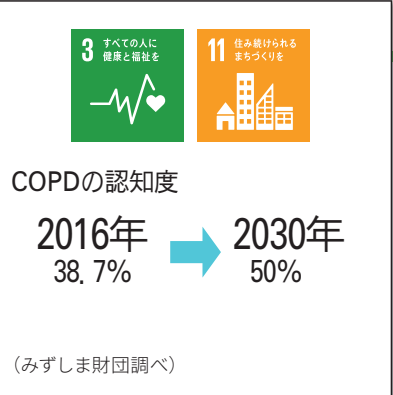
【地域での支えあい】

地域で孤立しがちな人を助ける「ちどり助け愛」や、「水島子ども食堂ミソラ」のような、暮らしの中の困りごとを解決するためのNPOの支援の活動がすすんでいる。



2030年の水島、こうなったらいいな

- 地域住民が主体的に実施する肺年齢測定等を通して、COPDや呼吸リハビリテーションのことで知り、早期発見・治療の取り組みが進み、健康的に暮らせる街になるようにする。
- 他地域からの移住者、一人暮らしの高齢者、子育て世代などが孤立しないよう、支えあう仕組みづくりを進める。



④芸術、科学をテーマに

<1995年の提案>

科学技術と芸術と自然の調和、新たにできた2つの芸術系大学との交流など、創造、研究、起業家の育成など、水島から、情報や新しい文化を国内外に発信させましょう。



現在の状況

【企業との連携】

コンビナートをはじめとする企業と連携を深め、環境対策技術や製造技術を学び、持続可能な地域づくりに貢献する人材育成を目指した「みずしま滞在型環境学習コンソーシアム」を設立した(2018年)。

【地元大学との交流】

倉敷芸術科学大学の卒業生が水島に開いたガラス工房を視察研修で大学生や留学生と訪れるなど、地域での文化活動と連携を目指している。生物系の研究室と連携し、八間川調査など地域での体験活動に関わることで、学生にとって現場での学びとなっている。公園を活用した賑わいづくりを目指して、ミズシマ盛り上げ隊が、水島中心地区の公園の遊具に倉敷芸術科学大学の学生と一緒にペイントを施し、注目を集めている。

【文化のまちづくり】

みずしま財団では、公害患者さんが咳を気にせず楽しめるコンサートを開催(2003～2017年)し、文化的な機会を地域に提供した。



2030年の水島、こうなったらいいな

- みずしま滞在型環境学習コンソーシアムで、長期滞在プログラムを整備し、企業では国内外の若者が科学技術や環境対策技術を学ぶことができるようにする。
- 若手のアーティストが大学と連携し、創造的な活動のできる地域と認識されることで、移住・定住する人が増えるようにする。
- 地域から新たな技術や文化の発信を進める。



⑤原風景、原体験を大切に

<1995年の提案>

水田、蓮根畑、浅海の漁業、近隣のふれあい、祭りなど、祖先から受けついできた恵みを私たちの世代で潰してはならない。原風景を守り復活させて残します。



現在の状況

【水島「原風景」の再生】

協議会が、地域の歴史や原風景について学ぶ「水島学講座(歴史編)」(2016年～)を開催することで地域を知り、愛着を育む機会を提供している。「亀島山地下工場を保存する会」により、「地下工場跡地」を題材にした学びと、跡地を平和教育の資源とする活動が継続されている。

【持続可能な農漁業に向けて】

みずしま滞在型環境学習コンソーシアムモデルツアの実施にあたり、漁業関係者や水島地域で木村式自然栽培による農業に取り組む団体と連携して、持続可能な農漁業を目指した取り組みを学ぶプログラムを実施した。水島愛あいサロンの芝生広場では毎月2回「水島朝市(主催:水島の未来を考える会)」が開催され、地元の農水産物を広める活動が行われている。



水島学講座の様子(2016年)



2030年の水島、こうなったらいいな

- 農漁業の作り手と買い手をつなぐ仕組みができるようにする。適正な価格での買取がされるなど、地域の小規模な農漁業が、経済的に成り立つようになる。
- 水島学講座で、干拓の歴史などを学び、海拔が低いといった地域の特性を知ることのできる備えを見直すなど、防災・減災への意識を高める。



⑥水島臨海鉄道の延長

<1995年の提案>

今あるコンビナート内の引込線を活用して新幹線の新くらしきと瀬戸大橋線児島間をつなげれば誰もが便利。自動車の排ガス対策にもなります。あわせてコンビナート南端の県有地にも延長。



現在の状況

【水島臨海鉄道の活用による通勤の足の確保】

水島臨海鉄道の利用促進を軸に、コンビナート企業への通勤手段の転換を目指した「エコ通勤協議会」がつけられ、試験的なバス運行も行われた。

【公共交通の確保】

水島と児島、玉島を結ぶ路線バスは多数廃止され、倉敷市街を起点に、倉敷芸術科学大学行、霞橋車庫行、JFE南門行、水島協同病院前行の5路線(両備バス)及び、児島行の2路線(下電バス)があるのみである。

みずしま財団では、水島地域内の公共交通の確保を目指して「水島に循環バスを実現する会」を倉敷医療生協等と立ち上げたが、運行までには至らなかった。

そうした中、2018年4月より、水島中央病院が運営主体となり、民間のタクシー会社が運行するコミュニティタクシーが、運行されている(倉敷市が一部補助)。



2030年の水島、こうなったらいいな

- 水島臨海鉄道を地域の基幹交通として、地域内をつなぐコミュニティタクシーが使いやすい形で整備され、高齢者も移動に困らない地域になるようにする。
- 気候変動への対策として、環境負荷の少ない移動手段の実現に向けて、低公害車(EV(電気自動車))バスが導入されるようにする。



⑦海辺、水辺を住民の手に

<1995年の提案>

砂浜のある海、魚つりのできる岸辺。ボートやヨットが楽しめる港。コンビナート南端の埋め立地将を緑と水と憩いの場に。高梁川に“わんど”を。



現在の状況

【水辺を住民の手に】

みずしま財団は、八間川調査隊の取組や、児島通生海岸や高梁川河口干潟の自然海岸で、指標生物の調査を実施している。調査や体験活動を通じて、特に子どもたちが自然環境に関心を持つ機会を提供している。

【持続可能な海域環境の保全】

みずしま財団は、1999年から備讃瀬戸海域の海底ごみの実態を先進的に調べ、海ごみ減量化に向けた政策提言を行った。特に回収処理の仕組みづくりは、国・地方の政策づくりへの契機となった。調査結果をもとに、市民向けの啓発活動に取り組んでいる。

【高梁川流域連携の取組】

流域の視点で持続可能な地域づくりを進めることを目的とした「(一社)高梁川流域学校」が2015年に立ち上げられた。高梁川流域に育まれた伝統や文化、産業に関する学びを流域の各団体が連携して支える取り組みが進んでいる。



2030年の水島、こうなったらいいな

- 水島周辺の海辺や水辺が学びのフィールドとして活用されるようにする。その取り組みを行政、企業、NPOが、協力して支援する仕組みづくりを進める。
- 八間川の川幅を広げ、傾斜護岸にすることで、親水空間としての機能と、豪雨等災害時の遊水機能が確保されるようにする。
- 高梁川から流入する海ごみの減量化を進める。



水島って どんなところ？

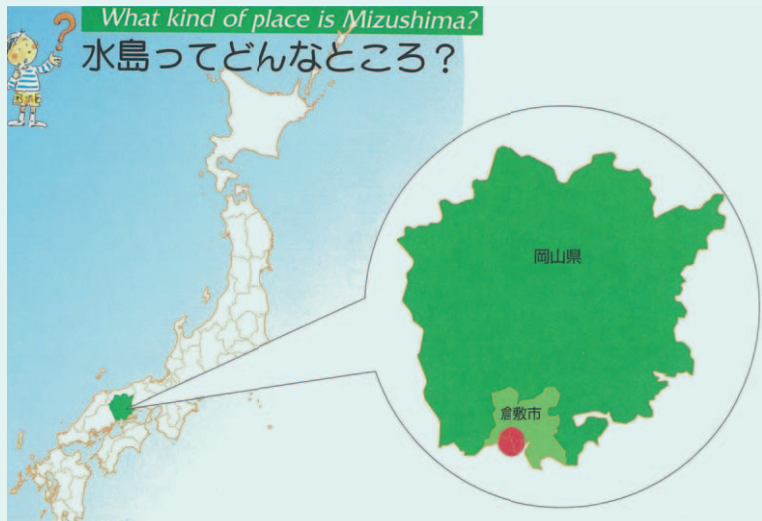
水島は、岡山県の南西に位置する倉敷市にある、瀬戸内海に面した地域です。

もともとは高粱川が流れ込む広大な干潟の海と農村地帯という風光明媚な場所でした。

1943(昭和18)年に航空機工場を建てるための埋め立てがおこなわれ、「水島」という地が誕生しました。その後も、高度経済成長の政策の下に土地の造成・企業誘致がすすめられ、現在では日本を代表するコンビナート・水島臨海工業地帯となりました。

その一方で、高度経済成長期には、その発展とともに大気や水環境の汚染を中心としたおびただしい公害問題も引き起こされ、多くの人命や健康、豊かな自然環境や歴史・文化を損なう事態が発生し、裁判にもなりました(1983年提訴、1996年和解成立)。

裁判の解決金の一部を基金に、公益財団法人水島地域環境再生財団(以下、みずしま財団)が2000年に設立され、地域の環境再生や環境保健、まちづくりの活動等をおこなっています。



公益財団法人 水島地域環境再生財団(みずしま財団)

〒712-8034 倉敷市水島西栄町13-23

TEL:086-440-0121 FAX:086-446-4620

e-mail:webmaster@mizushima-f.or.jp https://www.mizushima-f.or.jp/



公害患者さんの思い

公害患者の12名から、和解から25年が経って、大気汚染や地域のような暮らし向きなど、どのように感じているのかを率直にお話いただきました。

- 空気がきれいになって、暮らしやすい水島になってほしい。
- ばい煙が今もあり、問題だと思う。
- 1960年代に比べて、SO₂(二酸化硫黄)濃度は下がったが、それ以外の有害物質は排出され続けている。減らす努力はされているのだろうか？
- ホテルが増えて、活気が出るのはいいことだが、二度と大気汚染で被害者を出すような事態にはなってほしくない。
- NO_x、NO₂、PM_{2.5}、O_xとCO₂排出源は同じ。実質排出0の展望を。

大気環境について



まちのにぎわい

- 若い人が都会へ出て行ってしまふ。まちににぎわいが戻ってほしい。
- 水島中央公園や福田公園をにぎわいの拠点にしてほしい。

ほっとできる居場所づくり

- 「あそこにいけば安心」がもてるといいな。
- 園芸療法も取り組みえないかな？
- ケアハウスでいろいろしてもらえ。
- 福祉施設の増設をしてほしい。

暮らし

- 演劇が好き。
- 食農園や、朝市があれば、自分もしてみたい。
- 高齢者の足、便利さを確保してほしい。
- 水島臨海鉄道をもっと便利にしてほしい。

自然への思い

- コンビナートができる前は、アサリやハマグリがとれた。
- 八間川の古くなった柳の木を何とかしてほしい。
- 川がきれいになれば、ごみを捨てる人も減るのでは？

地域の方との対話

地域の現状と公害患者の声を踏まえて、「水島の未来、こうなったらいいな」というたたき台を作成して、地域の方々にご意見を求めました。

全体を通してのコメント

具体的な未来、そのためにはこれから何をしていくのかが見えてきます。ビジョン(こうなりたい)、現状の把握(できていない理由など)、そこまでの(ギャップ)をどう克服するのか、埋めるのが、行動計画だと思えます。今回のビジョンが2030年と考えると、具体的な数値を入れておくべきです。

①グリーンベルトでコンビナートをつつむ へのコメント
コンビナートに立地する工場が緑化に努めるとともに、水島市街地の財産である公園や空き地を活かし、緑いっぱいのまち(市街地)を創りたい。

②まちに賑わいの拠点を へのコメント
「若者が学びのできる地域として認識」とありますが、「若者が地域で暮らせる魅力を発見や創造して、地域はその応援ができるようになっていく」はどうでしょうか？施設整備や認識があっても「暮らす」「参加する」に意識がないと賑わいは生まれないのではないかと思います。

⑤原風景・原体験を大切に へのコメント
原体験を後世にまで伝えていくことこそが、財団の使命と考えます。その中で原風景は、いつの時代の風景なのかをしっかりとつかんで下さい。

⑥水島臨海鉄道の延長 へのコメント
高齢化社会が進むなか、免許証を返還した人たちの交通の手段としてデマンドタクシーを設置して、高齢者が安心して免許証を返還する糸口とし、高齢者などの交通事故削減に寄与する。同時に水島東西の移動の利便性をはかる。

各項目の「こうなったらいいな」にSDGsの17の指標と、具体的な数値目標を設定しました。

「こうなったらいいな」の文章、目標・指標に反映しました。

「こうなったらいいな」の文章、目標・指標に反映しました。

地域の方と対話を続け、共有していきます。

コミュニティタクシーの利用向上を各団体が連携し取り組んでいきたいと思います。

水島再生プランの「自主アセス」評価書

1. 住民アセスの新展開

(1) 水島再生プラン「自主アセス」の意義

「自主アセス」とは、自分たちの計画が環境や地域社会に対してどのような影響を与えるかを事前に検討して、地域の人びとに対して説明する自主的な行為です。従来は、開発事業者が、制度の対象とならない規模や種類の事業において自主的に環境影響評価(アセスメント)を実施するものを指しました。

水島再生プラン「自主アセス」は、このプランの実現を担うみずしま財団が自らの活動を再点検し、公害患者や地域の方々と対話の手段として取組まれました。また、国連が提唱するSDGs(持続可能な開発目標)に対して、どのように呼応していくのか、具体的な評価指標とともに打ち出しています。

地域づくり運動の新しい試みが、コンビナートとの共生をめざす水島から生まれました。

(2) 住民アセスの歴史的な役割

日本の環境アセスメントはコンビナート建設反対運動から生まれました。

兵庫県西宮市でのコンビナート誘致計画(1960年発表)や静岡県による三島・沼津コンビナート建設計画(1963年発表)では、住民アセスが取組まれて、住民運動に科学的な確信を与えて、巨大開発計画を断念に追い込みました。さらに、四日市公害裁判判決(1972年)による「立地上の過失」の指摘は、政府に環境アセスメントの制度化を迫りました。

大気汚染については、目に見える空気の汚れは改善されたものの、まだ不安に思っていて、ちゃんと監視されていくことを願っています。

地域のようなすでは、まちの賑わいが無くなってきたこと、移動手段がなくて交流の機会が減ったことなどを寂しく思っているようです。

暮らし向きでは、一人暮らしが大変で水島地区を離れて子どものいるところに引っ越さざるをえなかったなど、加齢による影響を色濃く感じました。

実際、聞き取り調査に応じられる状態の会員さんは少なく、お話は貴重なものでした。お元氣なところに、みずしま財団の八間川調査に参加し、若い人たちと交流したことをなつかしく語ってくれた方もいました。

③地域との対話

地域の現状と公害患者の声を踏まえて、「水島の未来、こうなったらいいな」というたたき台を作成して、地域の方々にご意見を求めました。

その中で、水島再生プランがめざす方向が地域の方々と共有できるものであることを再確認するとともに、一緒にやっていけることを増やしていく努力が必要だと感じました。さらに、具体的な目標とそれへの到達度をはかる指標を設けることが必要とご意見をいただきました。これらを踏まえて、新しい再生プランでは、SDGsとの関係を強く打出していくことにしました。

また、みずしま財団設立20年記念事業として開催された宮本憲一先生講演会「水島の過去・現在・未来を考える」(2019年10月)や第7回「公害資料館連携

住民アセスは、「開発事業を想定して、住民等が自主的に、住民参加型の調査学習活動を行い、その事業がもたらす影響と対策を検討する行為」のことで、他国に例をみない運動形態です。

その後も、大型道路や再開発、山岳道路などの開発計画に対して、住民アセスが取組まれ、大きな力を発揮してきました。

(3) 持続可能な社会へのアセスメント

これに対して、政府の動きは鈍く、環境影響評価法が施行されたのは1998年で、先進諸国の中で最も遅いものでした。

世界に目を向けると、米国では1970年代より、欧州諸国では1990年代には、戦略段階(政策や計画の段階)での環境アセスメントが行われています。近年では、環境・社会・経済を総合的にとらえた持続可能性アセスメントも取り組まれています。残念ながら、日本ではいまだに事業化段階での環境アセスメントにとどまっています。

水島再生プランの自主アセスは、持続可能な社会に向けた新しい環境アセスメントのあり方を、住民運動の立場から提起するものです。

2. 取組み経緯

(1) 実施体制

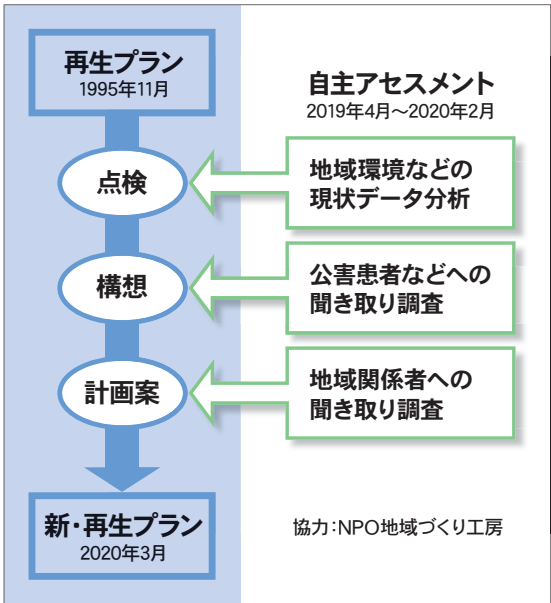
再生プランの見直しは、みずしま財団が主体となり、倉敷市公害患者と家族の会の協力が進められました。自主アセスについて、NPO地域づくり工房が協力

させていただきました。NPO地域づくり工房では、独立行政法人環境再生保全機構「地球環境基金」の助成を受けて「住民アセス支援ツールの開発と普及」を取組んでおり、そのモデル事業として位置付けています。

(2) 取組み内容(図)

①現状データの分析

みずしま財団では、再生プラン10周年の節目に、当時の環境や社会・経済の統計データを多用して、『水島地域の再生のために～現状と課題～』(2006年)をまとめています。これを読み直し、最近のデータとの対照表を作成し、この四半世紀にどのように地域の姿が変わったかをみしました。



②公害患者からの聞き取り

公害患者の12名から、和解から25年が経って、大気汚染や地域のような暮らし向きなど、どのように感じているのかを率直にお話いただきました。

③健康・福祉のまちづくり

園芸療法という声もありました。公害患者が地域社会とのかかわりを感じながら、主体的にかかわるプログラムも取り入れていきましょう。

④芸術・科学をテーマに

コンソーシアムは財団発足後の大きな財産です。これを活かした仕事おこして、財団が持続できる仕組みを主体的に考えていきましょう。

⑤原風景・原体験を大切に

2019年からは国連「家族農業の10年」です。行政や農漁業関係者と連携して、小規模ながら身近に農漁業を感じられる地域づくりを進めましょ。

⑥水島臨海鉄道の延長

延長にこだわらず、環境にやさしい基幹交通として位置付けることは大切です。各駅から横に広がる人の流れをつくる地域づくりに貢献しましょう。

⑦海辺・水辺を住民の手に

コンビナート地域の環境再生にとって象徴的な目標です。②と⑤の課題とあわせて、海辺や水辺への住民の往来を増やす活動を進めていきましょう。

4. おわりに

私は、当時、公害地域再生センター(おおぞら財団)設立準備会のスタッフとして、水島再生プランの作成や財団設立のお手伝いをさせていただきました。その再点検・評価の取組みに関与できたことを心から感謝申し上げます。

2020年2月24日

傘木 宏夫
NPO 地域づくり工房代表理事
(環境アセスメント学会常務理事)